

第14回 皮膚科の臨床 優秀論文賞発表

本誌編集委員会では、昨年（第59巻、2017年）に掲載されたものを対象に優秀論文の選考を行ってまいりましたが、この度、下記論文に第14回「皮膚科の臨床 優秀論文賞」を授与することに決定いたしました。

蜂窩織炎との鑑別を要した痛風発作の3例

著者：福田光希子ほか（川崎医科大学皮膚科）

掲載：59巻3号、334-337頁、2017年

要約：中高年の男性で、足首から末梢の発赤と腫脹を認め、蜂窩織炎との鑑別を要した痛風発作の3例を報告する。3例とも初診時に蜂窩織炎と診断し、抗菌薬を開始したが無効であった。臨床症状および尿酸値の推移や体表超音波検査の結果から痛風発作と考え、治療を行い、症状は改善した。中高年男性の足関節より末梢の蜂窩織炎様症状をみた場合、痛風の可能性を念頭に置き、詳細な問診、尿酸値の変動がないか確認することが重要である。体表超音波検査は痛風発作の診断に有用であった。

選考評

第14回 皮膚科の臨床 優秀論文賞の決定にあたっては今までと同様、臨床的に教訓的で日常診療に役立ち、かつ新規性を有するものを中心に選考しました。

福田先生の論文は、日常診療でよく目にする痛風発作を取り上げ、自験例を基に蜂窩織炎との鑑別について論じたものです。臨床写真を見ると蜂窩織炎と即断してしまいそうですが、白血球数、CRP、血沈などの炎症性マーカーでの鑑別は困難であること、また痛風発作時に尿酸値は診断の参考にならないこと、一方体表超音波検査が尿酸塩結晶を描出するため診断に有用であることなどを考察で述べておられますが、これらは実臨床に即座に役立つ情報です。珍しい疾患の報告ももちろん大切ですが、ありふれた疾患に着目し、その異同を論じた本論文は、実地臨床に役立つ情報を提供することを本懐とする本誌にふさわしく、まさに優秀論文賞に値するといえましょう。

受賞のことば

この度は名誉ある賞を賜り、まことにありがとうございます。審査に携わった諸先生方、査読して下さった先生方、日頃よりご指導いただいています先生方に心から御礼申し上げます。

今回受賞となりました「蜂窩織炎との鑑別を要した痛風発作の3例」ですが、うち2例は私が研修医の際に経験させていただいた症例でした。教科書でみると、痛風発作と蜂窩織炎は簡単に区別がつくもので、悩むことがあるとは思っていませんでした。しかし、実際現場に出ると意外と区別がつきにくいことがわかりました。痛風の診断には関節穿刺と教科書には記載されていますが、蜂窩織炎も鑑別にあがっている症例に穿刺は容易にすることができず、採血からも確信はもてず蜂窩織炎の治療を行っていました。そのなか、痛風発作は急性関節炎であり、関節超音波でみることができるということを教えていただきました。関節炎の所見があり、痛風の治療に切り替えたところ症状が改善しました。この経験から臨床所見や採血などである程度鑑別がつかないか、侵襲がないのであれば関節穿刺ではなく超音波を行ったほうがよいのではないかと考え、今回の論文を作成するに至りました。

改めて、周りの諸先生方にご指導いただいたおかげで受賞できたと思い、ここに感謝の気持ちを述べさせていただきます。ありがとうございました。今後ともご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。



- 受賞論文の筆頭執筆者には、賞状ならびに副賞として金一封・記念品を贈呈いたします。
- 本誌編集委員会では今後も優秀論文賞の選考を行ってまいります。投稿規定を熟読のうえ、奮ってご投稿下さい。